

III. 円海山近郊緑地特別保全地区の将来像の基本的な考え方

樹林や源流などの現状と以下の基本的な方針によって、ゾーニングを決めた。

生物多様性保全のために、昔の林の配置を目指す

今よりも生物の多様性が高かった頃の日本では、奥山の周囲に里山があった(図16)。奥山はある程度広くまとまっており、そこには、奥山特有の生物が生息していた。里山には様々な林齢の樹林がモザイク状にあり、里山に特有の生物が生息していた。

この樹林の配置は、生物多様性の保全に大きな役割を担うが、一方、大きな面積の緑地でしか創出できない。市内最大の緑地の一角である円海山近郊緑地特別保全地区は、この樹林の配置をめざすことが可能な、市内では数少ない場所である。従って、生物多様性保全のために、当地区では、この配置を目指す。

そのために、現在の樹林に無理のないよう、

- 1) 周囲を緑地に囲まれて、高い尾根が多く、常緑樹が多く大木の多い、樹林の遷移がより進んでいる、源流の山東側の樹林を「奥の山ゾーン(遷移の進んだ樹林のゾーン)」とし、
- 2) 開けた谷戸の景観で、樹林の遷移が進んでいない、散策路や広場・休憩所が多く、人の利用が多い西側を「里の山ゾーン」とする。

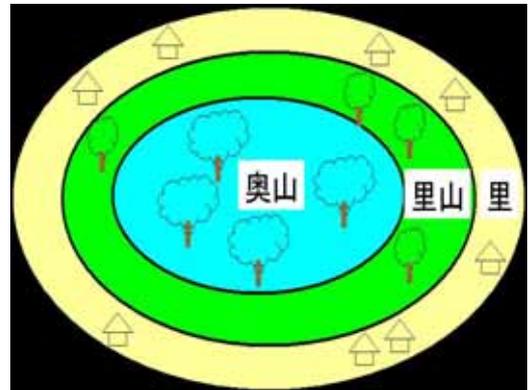


図16. 昔の林の配置イメージ

希少生物の多い源流域

希少生物が源流沿いの谷や沢に多いことや、源流の保全が下流の生物相への影響を持つことから、山のゾーン区分として区別して、

- 3) 源流の山から流れ出る2つの源流と、これを囲む急斜面を「源流ゾーン」とする。